

H-2 塩釜市浦戸寒風沢地区 2011年12月23日(金)

報告者名	酒井 朋子	被調査者生年	1936年(男)
調査者名	酒井 朋子	被調査者属性	漁業従事(カキ養殖)
補助調査者	相澤 卓郎		

被調査者について

塩釜市教育委員会から紹介を受けて聞き取りを行うことができた。寒風沢地区で生まれ育ち、ずっとこの地区に住んできた人物である。聞き取りは、調査者および被調査者の2名で、1時間半程度にわたっておこなった。場所は寒風沢の臨時の船着き場の待合室である。これは本来誰にでも開かれている公共スペースであるが、聞き取りの最後10分程度になるまで、他の利用者はいなかった。

寒風沢地区には、国・県・市の指定する無形民俗文化財はとくにない。よって、年中行事や生業の様子について全体的に話を聞いた。以下に聞き取りの概要をまとめる。

寒風沢の神明神社例大祭の震災による中止

寒風沢地区の年中行事としてたいへん重要なものに、神明神社の例大祭がある。例年であれば年に2回、4月の第1日曜日の春季大祭、および9月の第2日曜日の秋季大祭がおこなわれる。本来の祭日は、春季大祭が4月3日、秋季大祭が9月9日である。

神明社は明治39年に村社に指定され、浦戸諸島の中心として機能していた。昭和21年には指定は廃止されている。祭神は天照皇大神で、春は豊作祈願・秋は豊穰の祭りとしておこなわれている。また、航海安全の神としても祈願されている。

大祭の開始は11時からで、13時には神輿と渡御が開始される。浦戸諸島では大祭は航海安全の意味合いが強いこともあり、海岸線に沿って進んでいく経路をとる。神輿は、左右で4人ずつ、それが前後合わさり計16人でかつがれる。住宅地では5、6軒の家が休憩所となり、そこでは食事や酒が提供される。出される料理は様々で、刺身や煮付け、果物など多種に及ぶ。昔は各家で作ったものを出していたが、最近はスーパーなどで買って来たものを出す家もある。

住宅地を一通りまわった後に、御輿は南側の海岸を通る。そして、寒風沢を一周すると17、8時を過ぎており、そこで神輿渡御は終わる。

この大祭は部落で一番大きな行事であるが、今年はおこなわれなかった。震災があったため中止すると役員会で決まったためである。祭りを開くと多くの家が料理や酒を提供することになるが、それが震災のためただでさえ困難な生活の負担を増大させるから、という理由だった。

神明社の大祭は何百年も続けられてきた祭りで、話者の知る限り中止は初めてのことである。雨などで神輿渡御が中止になることはあっても、可能な範囲でおこなわれてきたのである。来年からは再開しなくてはならない。

ただ、祭りの道具を保管していた倉庫が津波で流されてしまったのが問題である。同じものを再びそろえたとしたら多くの経費が必要だろう。御輿かつぎの着る衣装や、おのぼり、太鼓なども流れてしまった。来年は御輿の出ない祭りになるかもしれない。

なお神明神社の近くには、他の島から移動してきた宮もいくつかある。船入島弁財天や、魚が集まる場といわれた大根神社の宮などである。移動は今より20年ばかり前になる。参拝が大変だから、というのが移動の理由だった。

津波の体験

話者が地震に襲われたのは海上でカキ養殖の作業をしていたときだった。強い揺れを感じていると、周辺でがけ崩れが起こりだした。間もなく揺れが収まり、寒風沢に戻った。入り江の内側は、波の来ない安全地帯だということが分かっていたので、寒風沢漁港ではなくそちらに舟を停めて陸に上がった。

寒風沢には3つの避難所があり、島の北・中・南の地区でそれぞれ別の場所に避難することになっている。話者は北地区の避難所に指定されている松林寺に避難した。

避難所についてからしばらくすると、津波が来る前に葉を取ってくると言って自宅に引き返していった方がいた。ほどなくして津波が襲来し、その方は亡くなってしまった。今回の震災では、この方を含め寒風沢で3名が亡くなった。

話者はずっと寒風沢に住んできたため、今回の震災以前にも大津波を体験している。とくに昭和35年のチリ沖地震のさいの津波は大きかった。海水があっというまにひいていき、水深5、6メートルあるはずの場所の海底が七ヶ浜近辺まで続いて見えたのがいまでも記憶に残っている。そのほかにも小さな津波はたびたびあり、地区のいくつかの家が浸水するようなことはあった。

カキの養殖

寒風沢地区の代表的な産業は漁業であるが、この話者も若い頃から様々な種類の漁業に携わってきている。ここ数年は、カキ養殖を主におこなっている。カキの養殖は一人ではできない。金銭的な面と労働量がその原因である。カキの養殖はカキの幼生を放卵するところから始まる。放卵後2週間すると、今度は成長したカキの幼生をホタテの殻を使って種付けする。種付けに使うホタテの貝殻は業者からまとめ買いする。1メートル50センチを超えるロープに74枚程度のホタテの殻がつけられており、この束を5,000本ほど、他の人の分も合わせて共同で購入している。1本当たりの値段は220円前後だが、今年は250~280円ほどになるという。

種付け後は、最初は近海で養殖するが、成長していくにつれて遠洋での養殖になる。今年のカキも、来年(平成24年)の6月には遠洋に出して本養殖がはじまるという。成長したカキの殻むきは10月からおこなわれる。これらの作業は共同で進められ、船着き場のすぐそこにある殻むきの作業場は人が集中するようになる。今回の震災ではこの作業場も被災しており、作業場の早期復旧が望まれている。

カキの養殖と共に、寒風沢で盛んな漁業に海苔産業がある。海苔づくりをおこなっていたのは元々6人だったが、津波により機械などが流されてしまった。そのため、今年も継続して海苔

を作っているのは1人だけである。機械の購入には数千万円の費用がかかることもあり、海苔づくりの再開は難しいものとなっている。